北海道新聞（夕刊）
第3種郵便物認可

せっけんに願う シリア平和

激戦地アレッポ名産

シリア内戦の激戦地アレッポは、せっけんの名産地としても知られている。現地の製造業者は戦火によって工場の移転を余儀なくされながらも、製品の輸出を続けている。せっけんを取り扱う輸入業者や道内の販売店は、現地の人々の安寧を願いつつ「せっけんが売れることがシリアの希望になれば」と願っている。

（報道センター　立野琢彦）

アレッポでは、地中海地方原産のオリーブオイルとローレル（月桂樹）オイルを煮で3昼夜たき、1年以上熟成させて完成させるという伝統的な製法が今でも守られているという。製品は無添加・無着料で、肌に優しいと人気が高い。

環境に配慮した雑貨を販売する「これからや」（札幌市白石区）は1994年から、アレッポ産のせっけんを取り扱う。店主の東田佳子さん（64）は97年に現地を訪問した時の街の様子が忘れられない。「元気に走り回っていた子供たちが今、どんな暮らしをしているのだろうかと思うと泣けてくる」

東さんは2011年の内戦勃発以降、シリア難民の映画を札幌で上映する際に協力するなど、現地の情勢を気に留めてきた。「どんなに大変でも、伝統を絶やさないように頑張っている人がいることを知ってほしい」と語る。

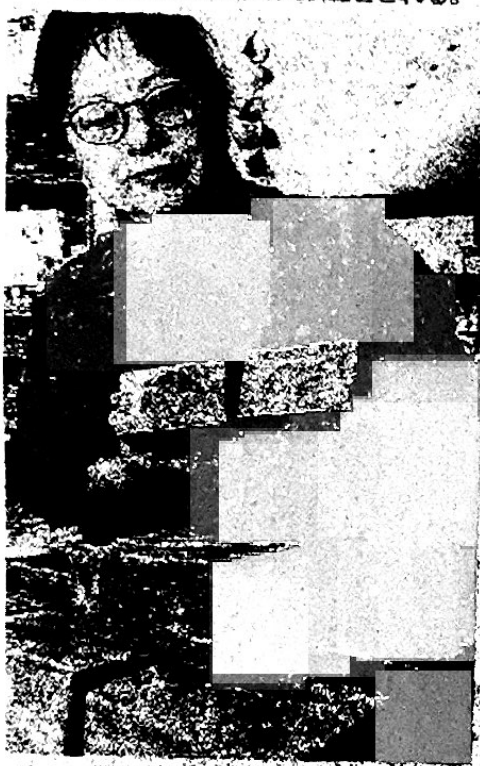
日本での取り扱いは、東京の輸入業者「アレッポの石鹸」が草分け的存在。350年以上続く老舗アデル・ファンサ社の製品を輸入し、全国の販売店に卸してきた。しかし、内戦勃発で状況は大きく変わった。現地では電気や水の不足、製造ができなくなったほか、在庫をアレッポから港に輸送するルートの変更も余儀なくされた。

「アレッポの石鹸」共同代表の太田昌興さん（46）によると、アデル・ファンサ社は14年、シリア北西部の港湾都市ラタキアに工場を移し、製造を再開した。太田さんはアデル・ファンサ社と頻繁に電子メールでやりとりを続けており、昨年末に届いたメールには「早く平和が訪れてほしい」などと書かれていたという。

太田さんは「支援も大切だが、経済を回していくことも大事。せっけんが世界で売れればシリアの希望になるし、誇りにもつながる」と話す。

アデル・ファンサ社のせっけん1個540円から。道内では雑貨店やドラッグストアなど約30店で取り扱っている。最寄りの販売店などに関する問い合わせは「アレッポの石鹸」☎042・552・7518へ。

アレッポ産のせっけんを手に、「シリア問題を身近に考えてほしい」と話す「これからや」の東田佳子



札幌の雑貨店販売「希望になれば」

シリア内戦　中東民主化運動「アラブの春」がシリアに波及し、2011年3月から反政府デモが本格化。アサド政権の武力弾圧に対し反体制派が武装闘争を始め、12年半ばまでに内戦に陥った。ロシアはアサド政権を支え、米国などは反体制派を支援。混乱の中で過激派組織「イスラム国」（IS）が台頭、「国家」樹立を一方的に宣言した。ロシアは15年9月に軍事介入、同年12月には政権側が北部の要衝アレッポを制圧、情勢は政権側の優位に大きく傾いた。国連などの仲介による停戦と停戦崩壊が繰り返され、死者は40万人以上とされる。

陸自隊員を減給
[illegible]

16年難民申請 初の1万人超

2016年の難民認定申請者数が、1982年に統計を取り始めて以降初めて1万人を超えたことが、関係者への取材で分かった。就労目的の申請が多いとみられ、法務省はさらなる厳格を迫られそうだ。

日本では10年の制度改正で、難民申請中の生活に配慮し、申請から6月経過すれば一律に就労を認めることになった。これを機に申請件数は10年は1282人だったが、15年には5886人に上った。

法務省によると、偽造近隣トラブルなど難民条約の定める迫害理由に該当しない人のほか、外国人技能実習生や留学生の留学生